

菊池川流域 日本遺産

菊池川下流域の船着場と港町（高瀬・大浜・晒）

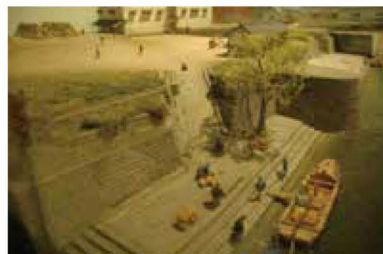


くまもと はん たか せ こめ ぐら あと

熊本藩高瀬米蔵跡

たかせおくらあと たかせふなつきばあと さらしふなつきばあと
高瀬御蔵跡・高瀬船着場跡・晒船着場跡

大浜町の外嶋宮ほか神社奉納物について



高瀬船着場復元模型
(玉名市立歴史博物館こころピア展示)



大浜外嶋宮住吉神社奉納絵馬レプリカ
(玉名市立歴史博物館こころピア展示)

■ 菊池川の恵みとともに栄えた高瀬、大浜、晒

玉名地域の中心に位置する高瀬は、菊池川河口の港として栄えた町です。古くは有明海を介して、海外との窓口になっていました。江田船山古墳や大坊古墳などからは、朝鮮半島からもたらされた金製耳飾りが出土しています。菊池川流域の豊かな森林資源や刀剣などは、高瀬の港から海外へ輸出され、有力武士団であった菊池氏の繁栄をもたらしました。菊池川からは大陸から輸入された大量の陶磁器が見つっています。また、海外からキリスト教の宣教師なども訪れています。

江戸時代には藩の重要施設である高瀬御茶屋、高瀬御蔵がおかれ、川尻、高橋とともに熊本藩の重要な港町であり、熊本、八代の両城下町と並び五か町として別格とされていました。町奉行がおかれ、有力な商人たちが活躍していました。高瀬の下流の大浜、晒とともに、菊池川水運の拠点を担いました。



JAPAN HERITAGE



菊池川下流域全体図

加藤清正は肥後に入国後、菊池川の河川改修を行い、高瀬から伊倉経由で流れていた流路を、高瀬から大浜、晒経由の現在の流路に付け替えたとされています。これによって現在の流路が固定され、江戸時代以降、菊池川の水運の中では高瀬から大浜・晒が重要な拠点に位置付けられるようになりました。

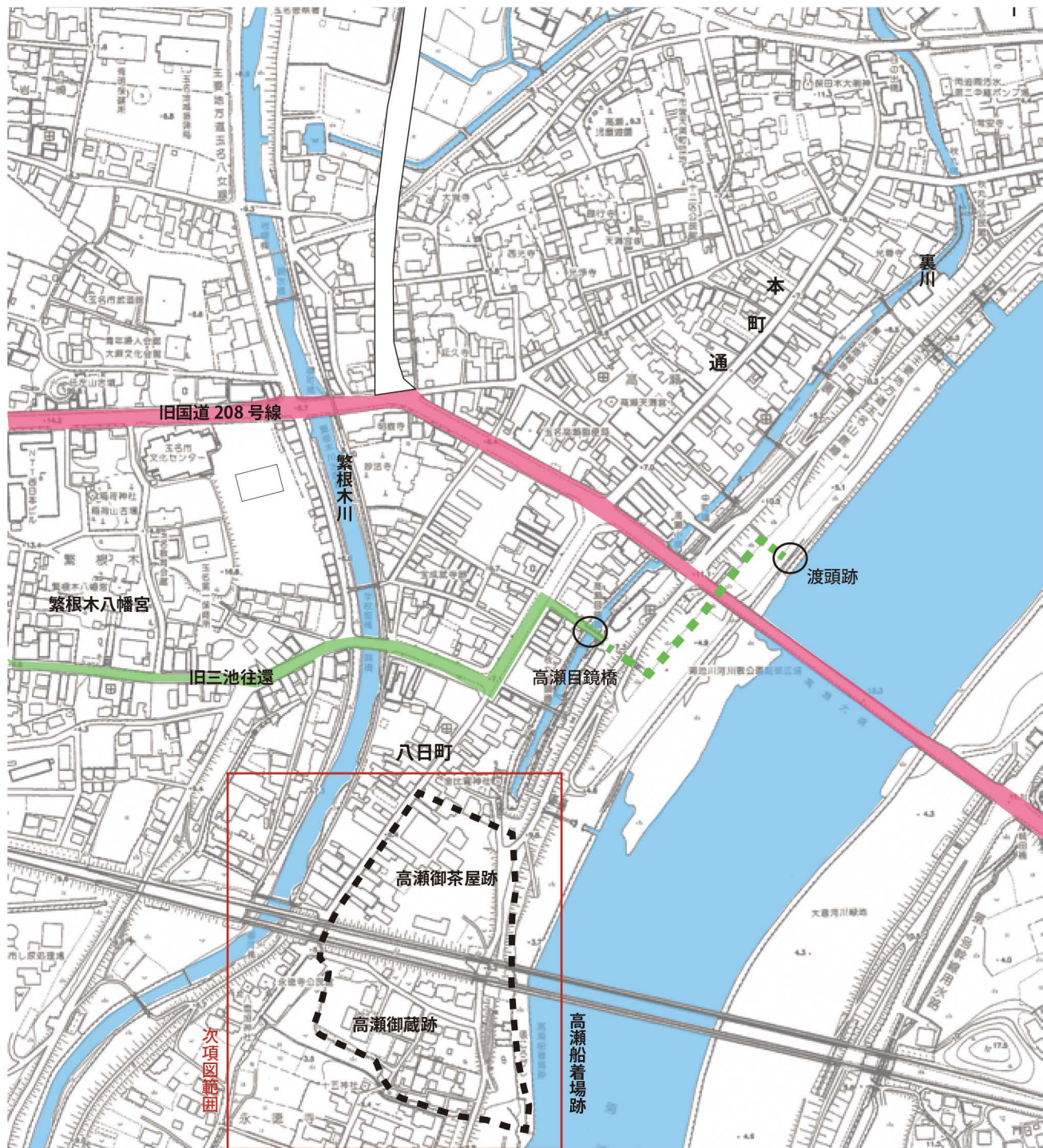
寛永4年(1627)の島原・天草一揆後には晒と大浜に御番所が設置されました。鉄砲や弓、槍が備えられ、外国船などからの河口周辺警備のために整備されました。江戸時代を通じて、高瀬、大浜、晒は菊池川水運の拠点として機能し、順次整備されました。



菊池川と高瀬



高瀬裏川花しょうぶまつりの様子



高瀬地区全体図

0 S=1:5000 200m



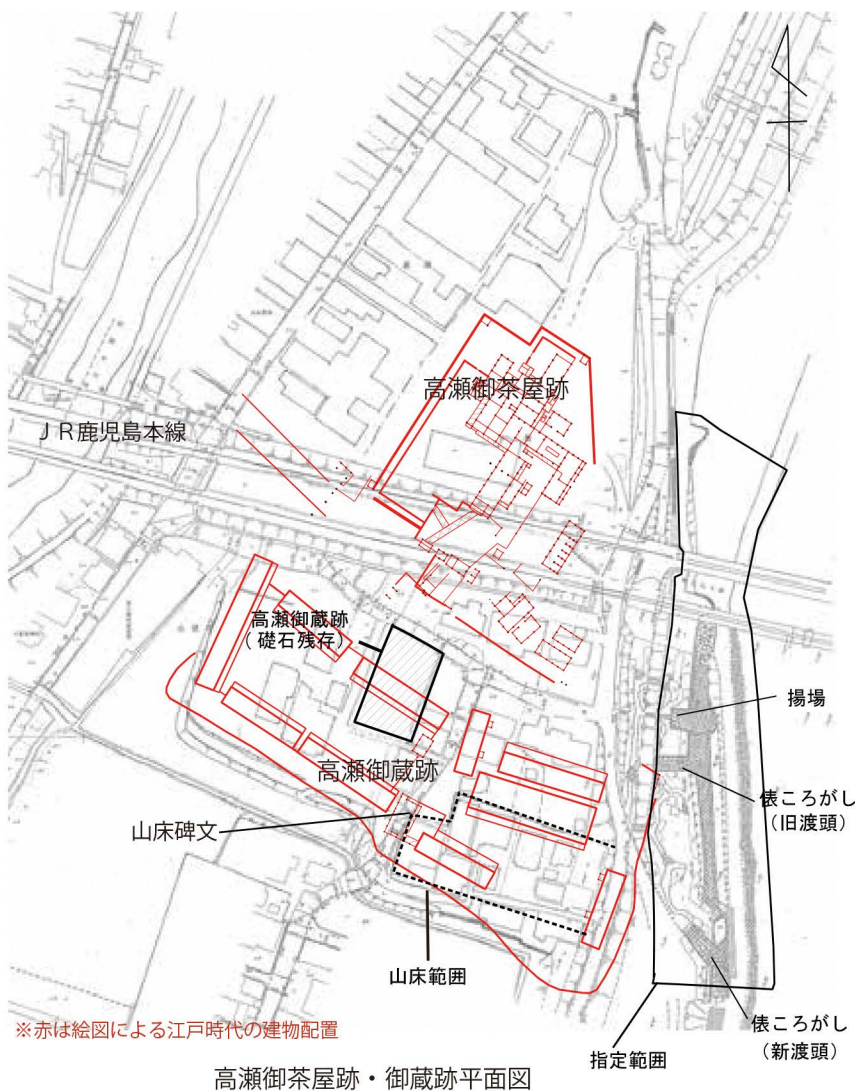
高瀬船着場跡新渡頭 (南から)



高瀬船着場跡旧頭渡 (北から)

■高瀬船着場跡

高瀬船着場跡は、高瀬御茶屋及び御蔵跡東側の菊池川添いに位置し、川岸の約100mほどの範囲が石垣で整備されています。かつては御茶屋への川側からの入口であり御蔵の年貢米の積み出し港で、米俵を船に積み込むための「俵ころがし」と呼ばれる石畳の斜路が設けられました。上流側は旧渡頭と呼ばれ、御茶屋への階段状の入口と俵ころがしがあります。下流側は新渡頭と呼ばれ、俵ころがし1基があります。山床碑文の記述から、天保12年（1841）に大規模な改修工事が行われ、御米山床とともに新渡頭が整備されたと考えられます。



高瀬御蔵跡の礎石

たかせおくらあと たかせおちゃやあと ■高瀬御蔵跡 高瀬御茶屋跡

高瀬御茶屋は、江戸時代の熊本藩の施設で、藩主、賓客や藩士の宿泊・休憩などに利用されました。現在のJR鹿兒島本線の北側の敷地が御茶屋跡で、堀に囲まれた建物が建てられていました。現在は建物はなく、井戸が残されています。御茶屋の南側が高瀬御蔵で、年貢米を保管する蔵や、米俵を野積みする山床が整備されました。

熊本藩の年貢米は、大坂の堂島へ送られるため、「津端三蔵」と呼ばれる高瀬・川尻・八代の各御蔵に集められ、厳重な管理が行われました。高瀬御蔵には、菊池川流域からの年貢米が納められ、嘉永年間には最大25万俵ほどが集められました。堂島への積み出し量は、文化年間の船積量が藩全体で約40万俵あり、うち高瀬20万俵、川尻15万俵、八代5万俵と、高瀬からの積み出し量が最大でした。積み出された年貢米は、熊本藩の財政基盤となり、藩及び地域を支える重要な収入源となりました。

江戸時代を通じて重要な役割を担っていた高瀬御茶屋と御蔵でしたが、明治10年（1877）の西南戦争で焼失し、その役割を終えました。



旧渡頭の俵ころがし（東から）



旧渡頭の階段状の揚場（東から）

■菊池川水運の玄関口、晒

菊池川左岸の最も下流部の河口付近に位置する晒は、流域外からは菊池川の玄関口として、流域内からは水運の終着点として重要な役目を果たした地点です。

寛永16年(1634)に川口番所が置かれ、のち晒番所として、鉄砲・槍などが配備されました。津口改小屋では、川への通行に必要な許可証である「川口出入札」を示す必要があり、坂下手永の惣庄屋から発給され、通行の管理が行われました。文化5年(1808)には、川床が浅くなり海辺の村々から高瀬御蔵まで遡るのが困難になっていたことから、晒に御米山床が設置されました。その後天保5年(1835)には高瀬御蔵の補助として機能させるために順次整備され、海岸沿いの村々からの年貢米が集められました。天保14年(1843)の年貢米納高は、高瀬に19万9050俵、晒に2万9656俵とされています。

大坂堂島への年貢米輸送は、晒沖で小型の船から大型の廻船へ積み替られました。晒は輸送の中継地としても重要な役割を果たすようになりました。

安政年間作成の『菊池川全図』の晒周辺には、堤防沿に上流から津口改小屋、ワク1基、俵ころがし、ワク2基が記載され、堤防内には俵ころがしに隣接して「晒御米山床」、下流のワク2基付近に「御番所」、「遠見」の施設が描かれています。現在の川岸は約200mほどが船着場として整備されており、このうち俵ころがし1基と、下流側のワクが2基残存しています。俵ころがしは、石畳が北側と南側に2基整備されています。

晒船着場が位置する地点は、菊池川とその支流の境川が合流するところでした。境川は、昭和の初め頃には流路が変更され、菊池川には合流せず、直接有明海に入る流路に整備されました。



晒船着場跡全景（南から）



晒船着場跡の俵ころがし（東から）



晒船着場跡の俵ころがし（南から）

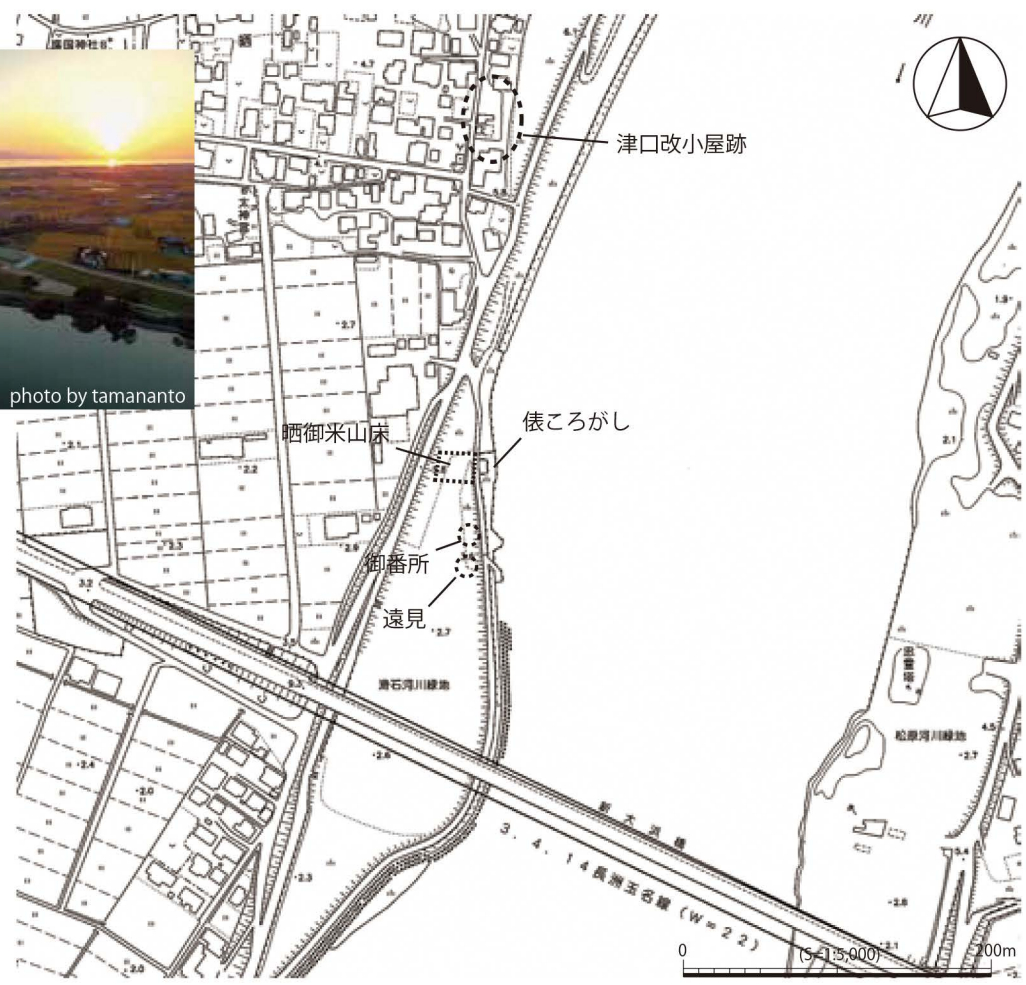


晒船着場跡三次元計測による立体写真



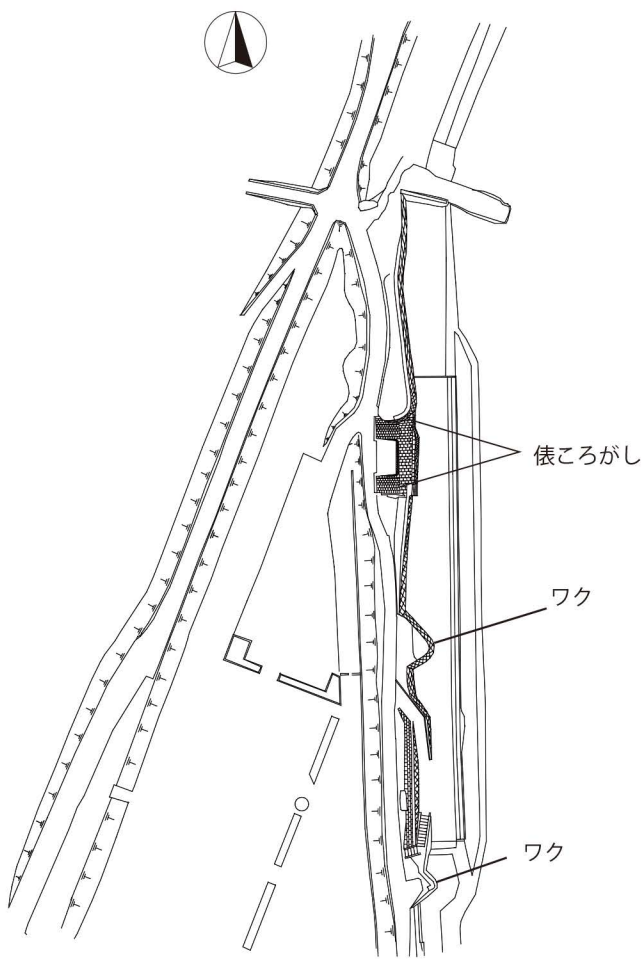
photo by tamananto

菊池川河口と晒船着場跡周辺（北から）



晒船着場跡周辺図

「ワク」とは…
 刎（ハネ）、脇（ワク）などいい、堤防から川の中に突き出た石造の構造物で、護岸や川の流れを調整する機能を持つ。



晒船着場跡測量図

0 40m
S=1:200



安政年間（1855~1860）作成『菊池川全図』の晒部分
 （『玉名市史資料篇 1 絵図・地図』から転載）

■廻船問屋が栄えた町、大浜

高瀬の下流約3km、晒の対岸にある大浜は、江戸時代以降、菊池川水運を利用した港町として栄えました。

大浜の中心にある外嶋宮住吉神社は、延久元年（1069）に摂州浪速の浦（現大阪府）から住吉大明神の神像を乗せた小船が流れ着き、それを祀ったのが起源と伝えられています。神社には、廻船模型や石造物が奉納されています。

文中元年（1372）の「清源寺所司定文」には、浜（大浜）の堤防が修理された記録があります。さらに応永13年（1406）、伊倉の宇佐公美による高瀬願行寺への寄進状には「伊倉保北方惣領の地の内、浜外新地、崇玄新開と号す」とあります。これらのことから、大浜は中世には伊倉八幡宮領で、すでに干拓によって新地開発がされていたことがわかります。戦国時代には、菊池川を挟んだ肥前の龍造寺氏と薩摩の島津氏の戦いで、外嶋宮は焼失したことが伝えられています。

寛永12年（1635）の「大浜村地撫帳」では戸数143戸、寛永年間の「船数しらべ」では船数37艘、水夫数155人と記載があります。明和元年（1764）の「大浜町地引合見図帳」では「大浜町」とあるように、江戸時代中期以降は在町として発展しました。安永9年（1780）には高瀬津方下会所が設置され、港としての機能の拡充が図られました。廻船問屋も船戸とともに大浜に移住したと語り伝えられています。

江戸時代以降、船運業が盛んになるにつれ、大坂屋や長崎屋と号する廻船問屋が繁栄しました。大坂への米運搬に従事する上荷船以外に、年貢米以外の「納屋物」とよばれる農産物（米、麦、菜種、大豆、小豆など）が取り扱われ

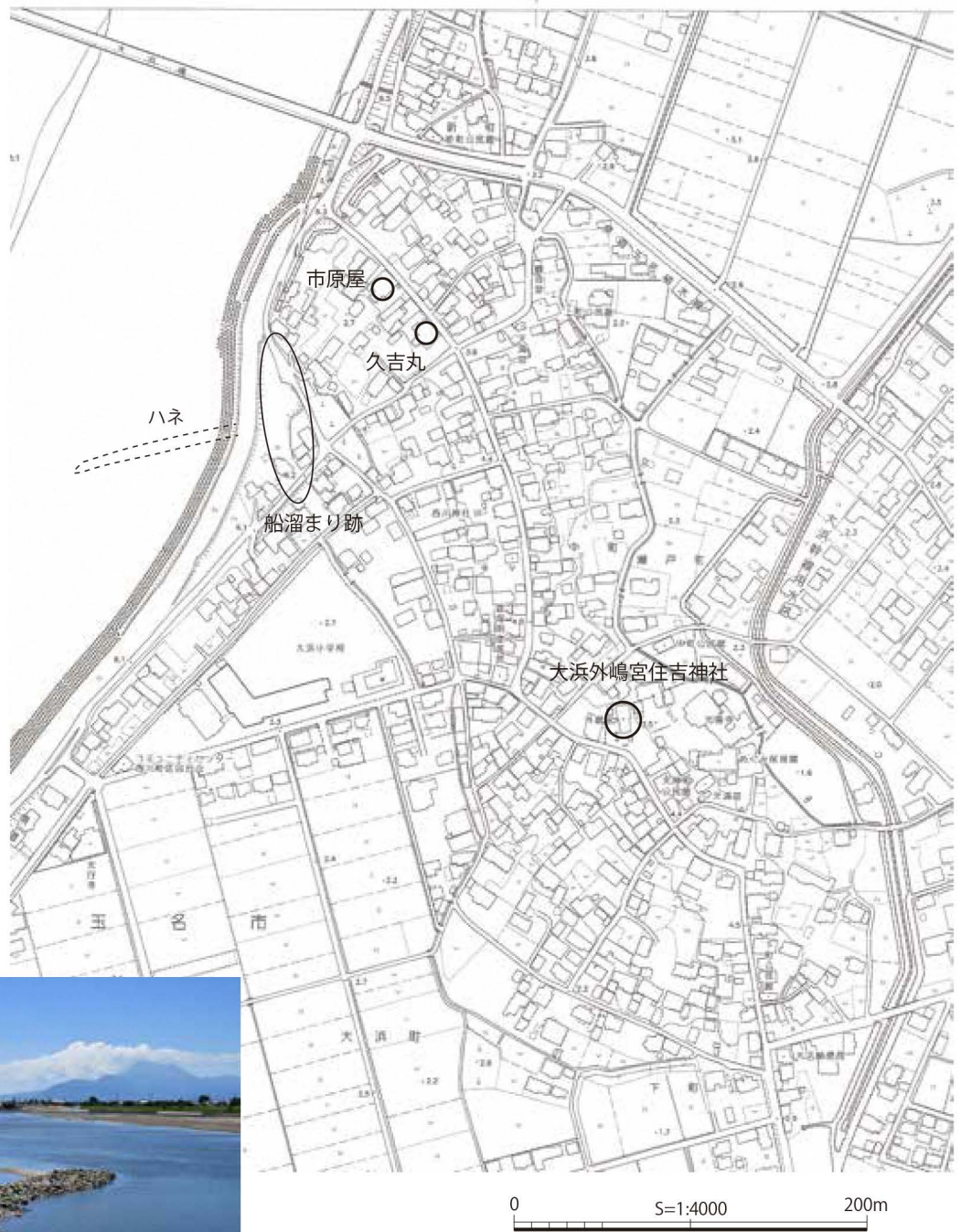
ました。天明4年（1784）大坂屋（村上家）の記録によると、菜種4924俵、大豆1100俵、米1858俵を輸送し、取引地域は大坂を始め備中玉嶋、備前下津伊、鞆浦などで、帰り船の積荷は繰綿や鯨油などでした。それらは玉名郡内のほか山鹿、隈府、熊本、川尻、牛深、三池、大牟田、口ノ津、平戸など各地の問屋と取引がありました。さらに藩の専売事業である精蠟事業にも関わり、蠟の原材料である樫実の集荷・運送を行っています。玉名郡、山鹿郡など菊池川流域から樫実を集荷し、水前寺蠟締所、鍋田蠟締所などへ送っていました。

外嶋宮をはじめ、晒の神社、繁根木八幡宮などには商売繁盛と航海の安全を願って廻船模型や燈籠・狛犬などが奉納されています。石造物の奉納銘文には、備中玉島（岡山県）、摂州（大阪府）など西日本各地の廻船問屋関係者の名が刻まれ、交流の広さを示しています。

江戸時代後半には火災が多くなったことで、防火機能に優れた漆喰壁の土蔵造り建物が多くなり、浜千軒と呼ばれる街並みが形成されました。外嶋宮に奉納されている、文政13年（1830）銘の絵馬には、廻船とみられる船が描かれ、帆を下ろした11艘と、白帆に風をはらませた8艘の船が確認できます。大浜町には100戸ほどの瓦葺きの家と、対岸の晒には60戸ほどの家が描かれ、活気に満ちた港町の様子がうかがえます。

およそ10年に一度開催される年季祭では、米引き行事や御伸幸行事が行われます。地区ごとに地域住民が町内を練り歩き、何隻もの飾り船が菊池川を渡るなど、船運で栄えた大浜を象徴する行事です。





大浜町中心部平面図



菊池川に長く突き出た、流れを制御するためのハネ



大浜町の菊池川沿い



大浜町の街並み



大浜外嶋宮住吉神社



年季祭の様子



外嶋宮住吉神社の石造狛犬（天保十五年）

阿形（東側：右）台座東面 銘文：長弼 赤馬関 高瀬屋吉兵衛
 台座西面 銘文：攝弼 大坂 長門屋吉兵衛
 備中玉島 西国屋半十郎
 咩形（西側：左）台座西面 銘文：長弼 赤馬関 石工 小倉清八



宝暦年間（江戸時代、18世紀中ごろ）外嶋宮に奉納された廻船模型（玉名市立歴史博物館こころピア展示）



外嶋宮の境内にある由来を記した縁起碑

■玉名地域奉納物関係地図

■長州赤馬関

下関の関門海峡沿いにあり、古くからの港町で瀬戸内海西側の玄関口として栄えました。九州から瀬戸内海に入る廻船と、北国からの北前船の寄港地となっていました。

■備中玉島

現在の岡山県倉敷市にあり、江戸時代には瀬戸内海沿いの港として物資の集積地になっていました。また瀬戸内海周辺は花崗岩が多く産出することから、石材の産地として知られていました。

■摂州大坂・堂島

現在の大阪府であり、近世には商人の町として栄え、全国の経済、流通の中心として繁栄を極めました。堂島には米会所が開設され、市場として大変賑わいました。

■和泉国日根郡

現在の大阪市阪南町で、古くから石材を産出し「和泉砂岩」として全国各地の石塔や石垣などに利用されました。また和泉石工の活動も全国に及びました。

■周防国三田尻

現在の山口県防府市にあり、江戸時代は毛利水軍の拠点として、近世には港として発展しました。

高瀬・大浜・晒



繁根木八幡宮



滑石の榊宮晒神社



繁根木八幡宮の石造狛犬（嘉永7年）
咩形（西側：左）
台座西面 銘文：備中玉島 西國屋半十郎



晒神社の狛犬（弘化2年）
阿形（東側：右）銘文：備中玉島 西國屋半十郎
咩形（西側：左）銘文：台座東面 備中玉島 西國屋半十郎
細工人 備中玉島 安田屋新藏
銘文：台座北面 大坂 長門屋吉兵衛
下之関 高瀬屋吉兵衛 同所 鍛冶屋清七
晒神社の灯籠
銘文：周防 祇園丸仁太郎
秋穂 祇栄丸久之郎
石工 泉屋 梅之助

※各神社奉納物銘文は玉名地域以外の関係者のみ記載

たまなし 玉名市 マップ



凡例
 208 : 国道
 112 : 県道・地方道



玉名市中心部と菊池川



玉名市マスコット「タマにゃん」

〈参考文献・図・写真出典〉
 ■『高瀬船着場跡関連遺跡』玉名市文化財調査報告第42集 2019年 玉名市教育委員会
 ■『市制20周年記念 玉名市の文化財総集編』1975年 玉名市教育委員会
 ■『玉名市史通史篇上巻』2005年 玉名市

〈製作・問い合わせ先〉
 〒865-0016
 熊本県玉名市岩崎 117
 玉名市立歴史博物館こころピア
 TEL:0968-74-3989 FAX:0968-74-3986
 玉名市 HP:<http://city.tamana.lg.jp/>

<https://www.kikuchigawa.jp/>

菊池川流域日本遺産公式サイト →

菊池川流域 日本遺産

検索

